農地周辺のイヌのフン放置に対する問題意識

○古賀亮平¹・甲田菜穂子²

(¹東京農工大学大学院農学府・²東京農工大学大学院農学研究院)

キーワード：イヌのフン、農地、迷惑行為

Attitudes towards dog droppings around the farmland

Ryohei KOGA¹ and Naoko KODA²

(¹The Graduate School of Agriculture, Tokyo University of Agriculture and Technology, ²Tokyo University of Agriculture and Technology)

Key Words: dog droppings, farmland, nuisance

目 的

イヌ飼育が、人に効用をもたらすことが多く報告されている。その一方で、イヌ飼育に関連した問題も多数発生している。特に、イヌの散歩中のフン放置は大きな問題となっている。公園や住宅地でのフン放置に関する調査はあるが、農地周辺に関するものは、著者の知る限り見あたらない。農地周辺は、イヌ飼育者には自然風景と認識されやすく、かつ農地管理者には自身の管理地と認識されやすいと考えられ、双方の認識のズレから、イヌのフン放置問題が発生しやすいと予測する。本研究は、実態調査の一環として、農地管理者が持つ、イヌのフン放置への意識を調査した。

方 法

調査地は、群馬県邑楽郡明和町を選定した。ここは一級河川沿いの平地で大規模な水田地帯が広がっており、現在も町面積の約3分の1が農地に覆われている。また、都市近郊部の通勤・通学圏に位置し、駅前を中心に新興住宅地が造成されている。その住居空間に隣接して存在する農地は、住民にとって重要な自然供給源であり、優良なイヌの散歩道も供給している。

調査方法は、農地管理者宛てに依頼状を配布後、直接対象者宅に訪問し、半構造化面接を行う訪問面接調査法を執った。質問内容は、①調査対象者の基礎情報、②イヌのフンに関する質問、③農地の管理状況に関する質問に分けた。

結 果

回答者は男性42名、女性6名であった。回答者の98%が、50歳以上であった。

イヌのフン自体に対する認識では、回答者の63%が汚いものだと思います、32%が汚いものとは思っておらず、その他の回答が4%であった。

イヌのフンと家畜のフンに対する認識の比較では、40%がイヌのフンと家畜のフンを同じものだと思います、54%が違うものだと思います、その他の回答が6%であった。同じものとした理由としては、イヌのフンは少量で大して影響がない、土にかえれば同じだといった回答があげられた。違うものとした理由としては、イヌのフンは生で、臭く、不衛生であるのに対し、家畜のフンは乾燥していて、臭くなく、加工されていて安全であるといった回答があげられた。

イヌに関する被害経験の有無では、回答者の79% (38名)が、被害経験があると答えた。その38名中36名において、イヌのフン放置を放置された経験があり、面接時の会話も、フンについての言及が多かった。また、被害経験がある人のうち、47%が「不快」に感じ、28%が「気にしない」、25%は「仕方がない」と答えた。

自身の農地沿いのフン放置の質問（複数回答）では、54%の人が気にする、46%の人が気にしないと答えた。そのうち、

気にする人は、被害経験の質問の「不快」、気にしない人は「気にしない」「仕方がない」とも答えていた。また、被害体験がない人の結果も、気にする／気にしないで約半数ずつに分かれ、偏った傾向はなかった。

イヌのフン放置の問題点（複数回答）では、回答者の42%が飼い主の無責任さやモラルの欠如について言及し、31%の回答者がイヌのフン放置に伴う衛生的な問題について、23%の回答者が町や地域的美観の欠損について述べた、また、15%の回答者は、自身が経験した不快な体験についての言及し、問題意識自体がないと答えた人は17%、無回答が4%であった。

考 察

イヌのフン自体に対する認識では、農地管理者の半数以上が、イヌのフンは汚いと答えた。また、家畜由来のフンに対する認識との比較では、約半数の人が、イヌのフンと家畜のフンは別ものと考えており、全体としてイヌのフンに対する印象は悪かった。

しかし、イヌのフンに対して悪い印象をもつ人全てが、農地沿いのイヌのフン放置を気にする、または不快な経験があると答えた訳ではなかった。逆に、イヌのフンをそれほど汚いと思わない人でも、フン放置を気にして、不快であると答えた人も多数いた。

その理由を、面接時の記述メモと、イヌのフン放置の問題点の質問結果から考察すると、フン自体への不快感よりも、飼い主の無責任な行為に対する憤り・問題視が、迷惑認知に大きく影響していると言える。

また、保健所の統計データ（群馬県、2012）や住民の証言から、町内で野良犬がほとんど見られなくなったことがわかっている。これが「イヌのフン＝飼い犬のフン」という認識の背景となり、社会的に問題とされる他の迷惑行為と同様、住民の美化意識や権利意識の向上と相まって、飼い主の責任に対する要求が強まったとも考えられる。

農地管理者は、日常的に土や堆肥にふれる仕事をしている。しかし、イヌのフンは、堆肥のような安全な加工物ではなく、不潔なもので、公衆衛生上の問題と認識されている。そして、それ以上に、飼い主の無責任さが問題であるとも考えられている。日本の農業には多くの課題があり、農地管理者は、イヌのフン放置にまで対処・主張をする余裕はあまりない。しかし、イヌのフン放置は、農地管理における問題の一つと考えられていることを、イヌのフンを放置する人は認識すべきだろう。

引用文献

群馬県 (2012). 群馬県全体の狂犬病予防業務・動物愛護業務推移 群馬県 2012年4月8日 <<http://www.pref.gunma.jp/04/p13210057.html>> (2012年4月8日)